

## 大人の対応

第16期 北嶋 梨紗

歳を重ねるごとに、人は喧嘩をしなくなるのだろう。それは、社会活動の中で協調性を学び、喧嘩になりそうになると、自分の意見を押し殺し、表面上だけは円満に見えるように「大人の対応」をするからだ。しかし、私はそれがあまりできず、小野ゼミではたくさん喧嘩をしてきた。喧嘩の種は、論文の方向性、グループワークへの姿勢などの真面目なものから、飲み会での態度などの軽薄なものまで多岐に渡るが、後にも先にもこんなに喧嘩をする2年間はないと思うほど、喧嘩をした。

私は、自他共に認める「思ったことを直言する性格」であり、小野ゼミにおいても、あらゆる場面で自分の意見をはっきりと表明してきた。同期には似たようなパーソナリティを持つ者が多くいたため、その度に意見が衝突し、喧嘩に発展した。私の代（特に日論班）では、2年間を通してかなり喧嘩が頻発したので、意見をぶつけ合える環境に対して特別なことだとも思っていなかった。

その認識が変わったのは、後輩が入会してからである。後輩たちは仲が良く、大きな揉め事も特になかったように見えた。しかし、よくよく話を聞いてみると、各々少なからず不満を抱いているようだった。私は、本音で話し合わない後輩たちが理解できず、相談に来てくれた後輩にも「まずは話し合いで思っていること全てを伝えればいいじゃん。」などと当たり前のように答えていた。すると後輩は、「自分の意見を言ったら喧嘩になりそうだから皆避けています。私の代にりささんみたいな性格の人いたら浮いていると思いますよ（笑）」と言った。その時、私は、後輩たちに対して「大人の対応だな」と思うと同時に、真正面から意見をぶつけ合える同期内の環境が当たり前ではないということに、初めて気づいたのである。

確かに、喧嘩は精神力をかなり消耗するので、避けたいと思うのはよく理解できる。ましてや、ただでさえ膨大なタスクに追われている小野ゼミ生活の中でならなおさらだ。それにもかかわらず、同期たちは、いつでも本気でぶつかり合ってくれたし、例えその喧嘩の当事者ではなかったとしても、当事者たちを疎むことなく受け入れる姿勢があった。そして16期は、そんな喧嘩を経て、互いの良し悪しを分かり合えたからこそ、「友達」の範疇に収まらないような、深い関係性を構築できたような気がしている。

複数人で何かに本気で取り組んでいる時に、意見がぶつからないことなんて、きつくない。しかし、社会に出てからはそのような場面でも、「大人の対応」で、見て見ぬ振りをせざるを得ないことが多くあるだろう。だからこそ、学生という真正面からぶつかり合うことが許される最後の機会に、それに応じてくれる同期に出会えたのは本当に幸せなことだと感じる。私は本音で語り合える同期がいなかったとしたら、2年間続けていられなかっただろう。私と真正面から衝突し、喧嘩をしてくれた同期たちに、心からの感謝を述べたい。熱すぎる2年間を、どうもありがとう。